青年海外協力隊現地レポート

■浪間美奈希（所沢市）
2016 年度１次隊　派遣国：モロッコ　職種：青少年活動／内容：家庭科(裁縫)

モロッコに来て思うこと

早いもので、任期残り半年となりました。
モロッコでの生活は日本のように時間に追われるということはないものの、言葉の不自由や文化の違い、村では手に入らないものや交通の便の悪さなど、何をやるにも時間がかかり、毎日毎日が飛ぶように過ぎていきます。

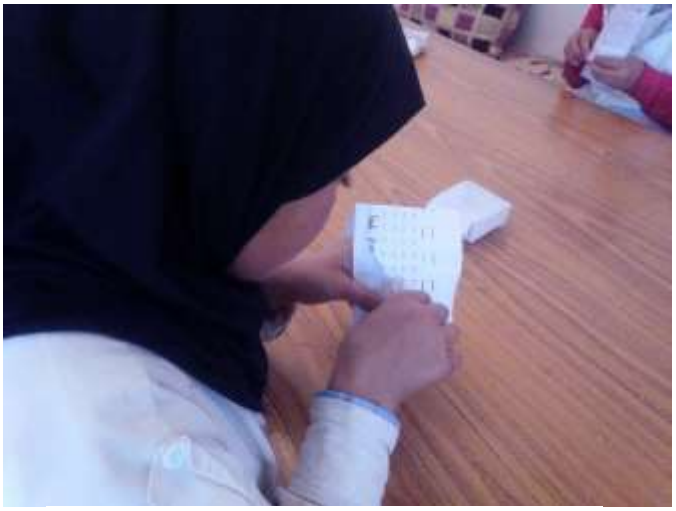
モロッコはアフリカ大陸の中では環境的に恵まれている国であると言われています。
実際に暮らしてみると、都市に出れば大概のものは手に入るので、何かがなくて本当に困ったという経験はありません。が、任地の村では手に入らないものは山ほどあります。例えばシャンプーは売っているけどコンディショナーはない、などです。

私の任地は首都ラバトから南西約 250 キロにある村で、周囲の町や村に比べて発展が遅く、アスファルトが国道１本のみという、砂で覆われた、しかも強風の村です。

我が家の屋上から撮った、花畑が広がる１枚。一番好きな風景です

村のいいところは、みんな素朴で、またすぐ砂まみれになるためか洒落た恰好をしている村人は若者ですらおらず、極端な話、寝間着で外を歩いても誰も気にしないところです。また小さな村なので、なにか変化を感じるとすぐウワサになります。例えば、“見ない顔(よそ者)が村に入っている”など。そうやって村が守られています。

この村に来て中学生に裁縫を教えるようになり、活動を通していろいろなことを感じています。イスの座り方、まっすぐ立つということ、字を書くときは利き手でないほうの手で紙を抑えるということ、手を清潔に保つということ…etc。よく考えると、普段私たちが何気なく行っている行為は幼少の頃にしっかりと教えられたものであり、けっして自然に身についたものではありません。日本の教育は本当にすごいと感謝をし、“勉強”という意味だけではない教育の大切さを強く実感しています。



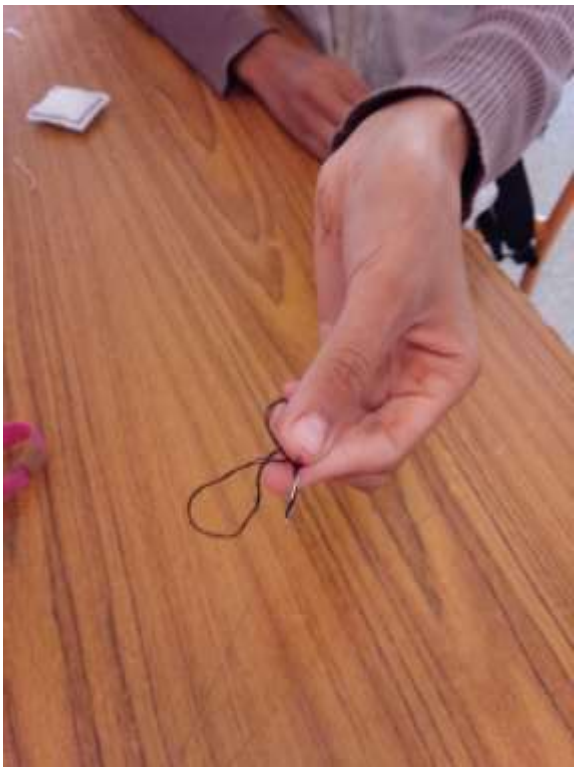
紙を使って様々な縫い方を練習

なぜか次の段にいってしまう

そして子供たちの吸収力の高いこと！

私の村ではアラビア語方言であるダリジャという言葉を使う為、国の第二言語であるフランス語会話を村で耳にすることはありません。しかし子供たちは小学校からフランス語を習っているため、私は敢えてフランス語を使用して活動をしているのですが、フランス語初心者の私と授業でフランス語を習っているだけの中学１～２年生のレベルでは正直共通言語ではありません。でも、ちゃんと伝わるのです。やはり人間同士だな、と思います。ハサミの渡し方を教えたあと、縫い針も同じように自分が針先をもって私に渡してきたときには本当に“すごい！”と思いました。できないのではなく、教えられていないだけなのです。

ハサミの渡し方を練習中



ハサミの渡し方を学んだら、針も他人が危なくないように渡せるようになりました

そんな子どもたちと私の合言葉は、「レペテ、レペテ、レペテ、ビヤン、ビヤン、ビヤン」。フランス語としては正しくありませんが、繰り返して繰り返して繰り返して、だんだん上手になる、という意味で使っています。
子どもたちはその言葉だけは理解をしているようなので、裁縫だけでなくフランス語でもなんでも、なにか好きなことを見つけて、今は出来なくても続ければ力になるということをいつか実感してもらえたらな、と思っています。

ハンカチに名前刺繍中
道具を使うと喜びます

ハンカチが出来上がりました

糸くずを入れる紙のゴミ箱。自分たちだけで作れるようになりました

ハンカチの次は巾着袋。巾着紐を通しています。
出来上がったら作った針山とハンカチを入れます

毎回今日は何日か質問をして、カレンダーの見方を練習します

花畑の中でひなたぼっこ